

古典中国語とその訓読情報を媒介とした現代日中両語の対照研究  
(デジタル文書技術を利用した)

河野勝也(日本大学短期大学部教授)

小田切文洋(日本大学教授)

論文要旨

漢文(古典中国語)、現代中国語、現代日本語、漢文読み下し文(古典日本語)、漢文(訓点情報付き)と、日中の古典語現代語を対照させたコーパスを開発した。

この日中古典・現代語の対照コーパスにより

1. 漢文(古典中国語)一現代中国語への変遷。
1. 漢文一漢文読み下し文(古典日本語)一現代日本語への変遷。
1. 訓点情報を活用した中国語文の構文解析

の対照言語的研究の可能性が広がった。

1. はじめに

近年、ユニコードの普及にともない、コンピュータの多言語環境が改善され、複数言語を混在させた対照言語的研究がパソコンでも利用可能になってきた。

このような情勢のなかで、北京日本学研究中心では、1998年秋から、『中日対訳コーパスの構築と応用研究』と称するプロジェクトが開始された。

筆者達はこのプロジェクトの協力者として、研究開発に参加している。

この過程において、『中国語一日本語対訳』だけでなく、

『漢文一現代中国語一現代日本語一漢文読み下し文一漢文(訓点情報付き)』と、漢文を基としながら、その日中の翻訳を併せて、5種類の中国語・日本語文を対照できるコーパスを提案し、その試作システムを開発した

この5種類の漢文を基にした日中両語の対照コーパスを、漢中日対照コーパスと呼ぶことにする。

日本人は漢文(古典中国語)を訓点という独特の読解法により読み下し、解釈をしてきた。当然ながら、訓読は中国語と日本語との語順を始めとした双方の性格の違いを自覚させるものとなった。この漢文訓読の工夫が、日本語文の形成にも大きな役割を果たしている。一方、表語文字としての漢字はその性格から新しい語彙を生み出しやすく、実際日本でも多くの和製漢語が作られている。漢文から直接入ったものも合わせて、漢語は日本語の語彙体系の骨格を作る上で大きな役割を果たしていると言える。

このように漢文は、文体形成の上からも、また語彙体系の上からも、日本語に多大な影響を与えている。

ところで、日本語も中国語も、古典語から現代語へと変遷する中で、日本語であれば接続関係や格意識など、中国語であれば介詞構造や関連詞による複文構造など、語と語との関係を明確にし文全体の論理性を明晰にする傾向が見られる。

漢中日対照コーパスを用いれば、漢文—現代中国語—日本語における漢語語彙の変遷を検討することが出来るばかりでなく、日中の古典語と現代語の構文組成がそれぞれに持つ特性を通時的に対比研究することが可能となる。

## 2. 試作システムの概要

### 2、1 使用OSとアプリケーション

基本作業は、Uni-Code対応が進んで、かなりの程度まで多言語環境を実現できるWindows2000とOffice2000を組み合わせて行った。

### 2、2 収録内容と文字コード

収録文献は、六朝期に成立した『西京雜記』である。短編集であり、段落の対応が明解であることと、叙事を基本としたあまり複雑ではない構文なので、対照研究のモデル作りとして最適であると考えこれを選んだ。文字コードは、漢字文献の電子化に一般的に採用されるようになってきたUni-Codeを選択した。

### 2、3 データ入力の手法

#### 漢文・漢文読み下し文入力

漢文及び読み下し文は、福井重雅編『西京雜記・独断』東方書店2000年に主として拠った。『西京雜記』は、前漢一代の風俗や逸文、雑事を記録した短編集である。思弁的な内容を含む書物ではないので、特殊な固有名詞以外はおおよそUni-Codeの範囲で納まるので、旧字体で入力した。

#### 漢文入力（訓点情報付き）

漢文の構文においては、単語の位置が語句の文章や意味を決定する。主語・述語、述語・補語、修飾語・被修飾語など語と語との結合関係を特定しないと、漢文は正確に解釈できないのである。私たちの先祖は、訓読を施すという作業の中で品詞の決定や句節の関係を考えてきたのである。日本語との対照作業は、自ずと語順の問題に導いたのである。この構文情報をもつ訓点を入力するにあつての問題点は、一

二点などの返り点がそのままでは原文に混じってしまうことである。データが蓄積されていくと、タグ付けなど何らかの統一した処理が必要になるが、実験的な段階なので、便宜的に数字で代用し、レ点は0，一二点はそれぞれ1・2と置き換えた。再読文字は便宜的にaの記号を付した。訓点そのものは、上掲の文献を参照しながら筆者達で確定したものである。

#### 現代中国語訳入力

現代中国語訳は、成林・程章灿译注『西京杂记全译』贵州人民出版社 1993 年の訳文に拠った。現代中国語の入力は、マイクロソフト中国とハルビン工業大学が開発した中国語 IME である微软拼音输入 2.0 版を用いた。簡体字は Uni-Code に含まれているので簡体字用のフォントと組み合わせ、入力作業はすべて Word2000 を使い進めた。

### 2、4 訓点情報

『西京雜記』の原文は、上下点になるまでの入り組んだものは少なく、また「於」「于」などの助辞もあまり見られないが、「以<sup>2</sup>正月旦<sup>1</sup>作<sup>0</sup>酒」のように、手段や時間などを示す「以」など幾つかの助辞が使われている。これらは現代中国語の文法でいう介詞に相当するものであるが、ちなみに同じ箇所現代中国語を見ると、「从正月初始一开始酿酒，八月酿成」と介詞の「从(従)」を使い時間の起点を明示した解釈を取っている。

構文が単純なばかりでなく、種類もそれ程多くなく、分類をすると、(1)「皆值百金也」のような、「aはbである」、「aがbする」形式の主語・述語の関係のものか、(2)「養<sup>0</sup>魚」「祭<sup>2</sup>山川<sup>1</sup>」のような、「aをbする」「aにbである」形式の主語・目的語あるいは補語の関係のものがほとんどである。

語順で気を付けなければならないのは、再読文字といわれたりする「未」「将」や、同じく最後に返って読まれる「欲」「得」のような、動詞の上にあって動詞を補語とする助動詞的な助辞である。「未<sup>a</sup>能<sup>0</sup>親<sup>2</sup>外傳<sup>1</sup>」と「欲<sup>0</sup>伐<sup>2</sup>昆明胡<sup>1</sup>」とは、二度に分けて読むか最後に返って読むかの訓読上の約束の違いがあるが、語法的には同じ働きをするものである。

### 3. 今後の開発計画

漢中日対照コーパスは、現在段落単位で対応付けを行っているが、より厳密な対照研究をしていくには、文単位での対応付けが望ましいであろう。文学作品であれば、話法や視点と関わって文の機能が多様なので、一文毎の対応付けが難しい面もあるが、収録文献は、比較的単純な叙事文なので、対応はそれ程難しくないと思慮される。

前述したが、近代語になるほど語と語との関係が限定的になるので、現代の文章

語が形成されていく歴史的過程の研究に活用していく方向性が考えられる。中国語であれば、文勢として潜在化していたアスペクト的な表現が、現代の文章では明示的になるとか、中国語の特色とされている量詞の細かな使い分けなど、これからデータを増やしていけば、さまざまな応用が考えられる。訓点情報も語順の決定のための解析データとして、活用していく方向性を現在模索している。まだ試論の段階だが、モデル作りと全体像の確認のために当研究を試みた次第である。

#### 4. おわりに

『漢文、現代中国語、日本語、漢文読み下し文、漢文（訓点情報付き）』と、漢文(古典古典語)を基として、5種類の日中対訳コーパスの試作版を作成した。

これを漢中日対訳コーパスと称することにした。

将来は、漢字ハングル混交文の韓国語も加えて、漢中日韓対訳コーパスを開発したい。

漢字あるいは古典中国語（漢文）を基礎としたアジア漢字文化圏の相互理解の一助としたいと考えている。

中日対訳コーパスを開発している北京日本学研究中心、日立製作所中央研究所とは、緊密なコミュニケーションをとり、共同研究の成果を上げつつある。

#### 5. 謝辞

中日対訳コーパスの開発の指導的な立場にあり、種々のアドバイスを賜った、

徐一平教授（北京日本学研究中心副センター長）

曹大峰教授（山東大学）

に深く謝意を表明する。

また、対訳コーパスの検索ツールの仕様について貴重な助言をいただいた

隈井裕之主任研究員（日立製作所中央研究所）

に深く謝意を表明する。

#### 6. 参考文献

小川環樹・西田太郎『漢文入門』岩波書店1957年

田中秀『漢文から中国語への道』永和語学社1981年

今富正巳『しくみで考える中国語読解教室』白水社1998年

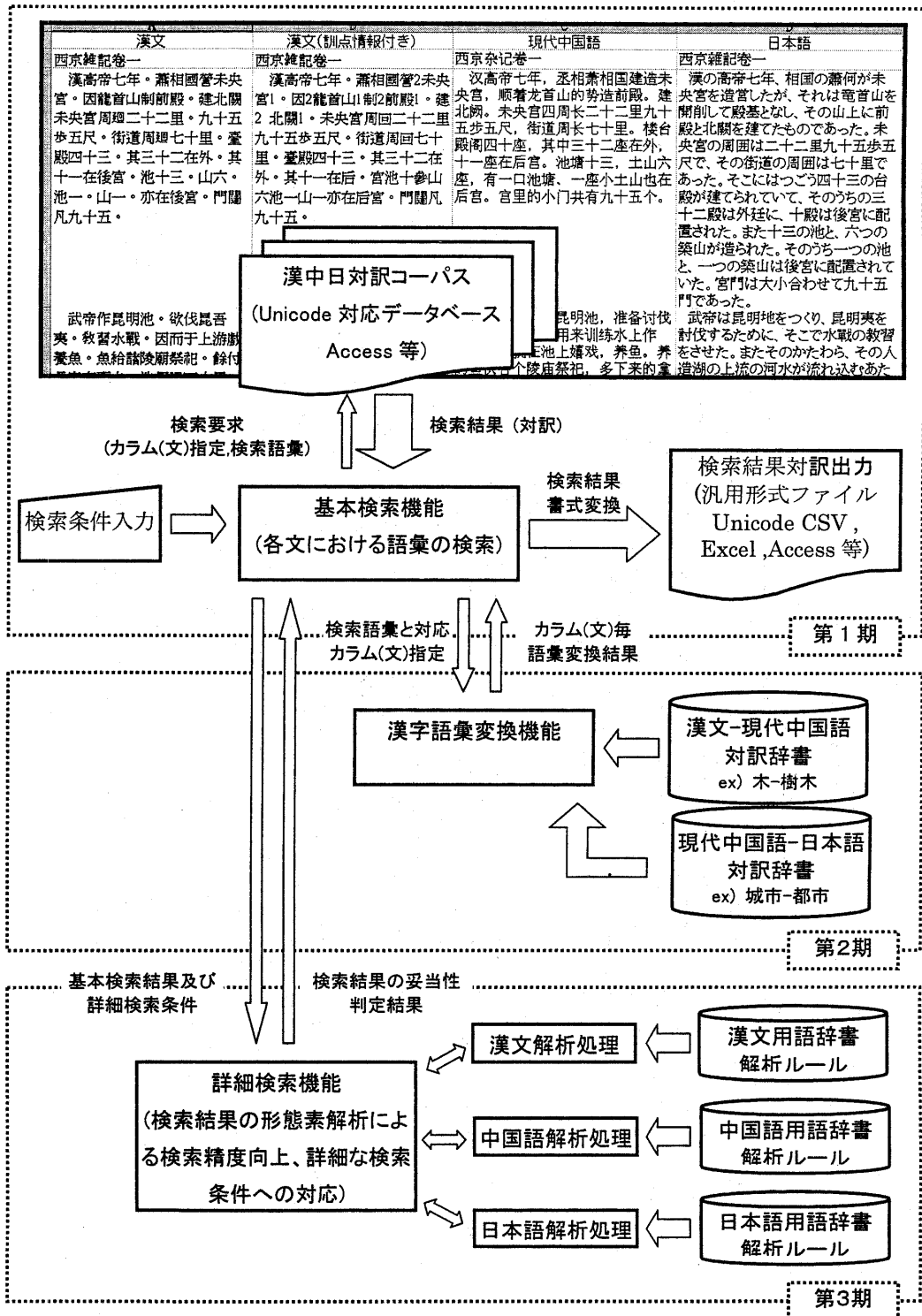


図1 漢中日対訳コーパス検索システム開発構想

西京雜記  
前漢劉歆撰西晉葛洪編

西京雜記卷一  
漢高帝七年。蕭相國營未央宮。因龍首山前殿。建北闕未央宮周廻二十里。九十五步五尺。街道周廻七十里。臺殿四十三。其三十二在外。其十一在後宮。池十三。山六。池一。山一。亦在後宮。門闕凡九十五。

西京雜記卷一  
前漢劉歆撰西晉葛洪編

西京雜記卷一  
漢高帝七年。丞相蕭相國建造未央宮。順龍首山的勢造前殿。建北闕。未央宮四圍長二十二里九十五步五尺。街道周長七十里。臺殿四十三。其中三十二座在外。十一座在後宮。池十三。山六。池一。山一。亦在後宮。門闕凡九十五。

西京雜記  
前漢劉歆撰西晉葛洪編

西京雜記卷一  
漢的高帝七年、相國の蕭何が未央宮を造営したが、それは龍首山を尖削して殿基となし、その山上に前殿と北闕を建てたものであった。未央宮の周廻は二十二里九十五歩五尺、街道の周廻は七十里であつた。そこにはつごう四十三の臺殿が建てられていて、そのうちの三十二座は外廷に、十座は後宮に配置された。そのうち一つの池、築山が造られた。そのうち一つの池と、一つの築山は後宮に配置されてゐた。宮門は大小合わせて九十五門であつた。

西京雜記  
前漢劉歆撰西晉葛洪編

西京雜記卷一  
漢の高帝七年、相國の蕭何が未央宮を造営したが、それは龍首山を尖削して殿基となし、その山上に前殿と北闕を建てたものであった。未央宮の周廻は二十二里九十五歩五尺、街道の周廻は七十里であつた。そこにはつごう四十三の臺殿が建てられていて、そのうちの三十二座は外廷に、十座は後宮に配置された。また十三の池と、六つの築山が造られた。そのうち一つの池と、一つの築山は後宮に配置されてゐた。宮門は大小合わせて九十五門であつた。

西京雜記  
前漢劉歆撰西晉葛洪編

西京雜記卷一  
漢高帝七年。蕭相國營未央宮。因龍首山前殿。建北闕。未央宮周廻二十里。九十五步五尺。街道周廻七十里。臺殿四十三。其三十二在外。其十一在後宮。池十三。山六。池一。山一。亦在後宮。門闕凡九十五。

武帝作昆明池。欲伐昆吾夷。教習水戰。因而于上游戲養魚。魚給諸陵廟祭祀。餘付長安市賣之。池周廻四十里。

漢武帝時、开凿昆明池、准备讨伐昆吾夷部落时、用来训练水上作战。于是在池上嬉戏、养鱼。养由りて上遊に於いて戲として魚を養はしむ。魚は諸々の陵廟の祭祀に給し、餘は長安の市に付えて之を賣る。池の周廻は四十里なり。

武帝作2昆明池1。欲0伐2昆吾夷1。教2習水戰1。因而于於2上游1戲養0魚。魚給2諸陵廟祭祀1。余付2長安市1賣0之。池周回40里。

漢制宗廟。八月飲酎。用九醞太牢。皇帝侍祠以正月旦作酒。八月成。名曰酎。一曰九醞。一名醇酎。

漢代的制度、宗廟每年八月飲醇酒、祭祖、用醇过多次的醇酒和牛、羊、豕三牲为供品、皇帝主持祭祠、从正月初一开始釀酒、八月月に成れば、名づけて酎と曰ふ。八月にできあがるので、これを名づけて醇酎とも稱した。

漢制宗廟。八月飲酎。用2九醞1太牢1。皇帝侍祠。以2正月旦1作0酒。八月成。名曰酎。一曰九醞。一名醇酎。

京師大水。祭山川以止雨。丞相御史二千石禱祠。如求雨法。

京都遭水灾、要祭山川祈禱雨、以て雨を止む。丞相、御史、二千石の官員去禱祭祀、想求雨の方石禱祠すること、雨をむる法の如くす。

京師大水。祭山川以止0雨。丞相御史二千石禱祠。如2求0雨法1。